

H17 国立高専 国立 国語 問題

国 05 国 高専 問 01

1 次の各文の 線を引いた問1から問6までの片仮名の部分を、漢字に改めよ。(楷書で書くこと。)

問1 入学式場に新入生の席をモウける。

問2 勇気をフルい起こす。

問3 機械がコシヨウする。

問4 飛行機をソウジユウする。

問5 カンケツな文章は読みやすい。

問6 生産のコウリツをあげる。

国 05 国 高専 問 02

2 次の各文の 線を引いた問1から問5までの漢字の読みを、平仮名で書け。

問1 この財布は私のものと酷似している。

問2 政界と財界との癒着。

問3 けが人に応急手当を施す。

問4 給料で賄うのは無理だ。

問5 先生の柔和な顔を見る。

国 05 国 高専 問 03

3 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) 貞享甲子秋八月、(注2) 江上の破屋を出づる程、 風の声ぞぞろ寒げなり。

野ざらしを心に 風のしむ身かな

貞享元年、松尾芭蕉四十一歳の秋、いわゆる『甲子吟行』の旅に出る

時の吟である。これから長い山河の旅に出るのだが、さほど頑丈でもないこの身は、いつ野山にのたれ死にをして、雨風に(注3) 體ていをさらすことになるかもしれない。そのことを心に思いながら、いま江戸の草庵そうあんを出立しようとするが、初秋の風がことさらに身にしみてわびしい思いがAするといつのである。「身にしむ」という言葉は、秋の季語である。

たたずめば身にしむ水のひかりかな

久保田万太郎

などというのもある。「身にしむ」というのは、身内に深く感ずる、感染する、という意味だが、これが季感を持つに至ったのは、歌人たちが詠んできた伝統によつてである。万葉の歌にも既に出てくるが、平安朝の中ごろから歌人たちに愛用され出した。初めは季節とA関係なく詠んでいるから、春の歌も秋の歌もあり、無季の歌もあった。だが、次第に秋の歌が圧倒的に多くなつてきて、ことに、「秋風は身にしむばかり」「秋風の身にしむ夜半よはの」「身にしむ秋の風」などと、主として秋風について言うようになった。藤原俊成ふじなりの歌、

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里 (千載集)

が名歌として喧伝けんでんされてからは、この歌の連想を伴わないでは、B考えられないくらいになった。だが、風だけではなく、梅の香が身にしむとか、鹿かの声が身にしむとか、身にしむ秋の恋とかいった例もあつて、
一概には言えない。

勅撰集ちやくせんしゅうの秋の部に入れてある例は、多くは、上下二巻ある秋の部の、下巻の方に入っていて、そのことは、「身にしむ」の例歌が、おおかた深

秋・晩秋の季節のものであることを証している。身内に深く感ずるものは、秋の「もののあはれ」あるいは寂寥感せきりょうかんである。

当時の宮廷貴族の生活で理想とされたのは、「心ある」という状態である。実生活上では、思いやりがあること、理解力・判断力に富んでいることで、趣味・C芸術の上では、美的情趣を解することである、別の言葉でC言えば、物のあわれを知ることであり、世の中のこと、人の心の奥のすみずみまで知り、物の道理をわきまえることである。紳士の最高高の教養だつたと言ってもよい。

ところで平安末期になると、Dそれがいちじるしく感傷性の方へ傾斜してくる。秋のあわれを知ること、心ある人士の当然の要件であつたが、何にでもすぐほろりとなる涙もろさが強調されてきた。きらいがある。そついつ当時の情緒生活を背景として、「身にしむ」という言葉の含蓄も、E複雑なニュアンスを帯びながら固定してきた。「身にしむ」とは、何よりも、秋のあわれを身内に深く感じ染ませるということ、秋のあわれは、まず秋風が告げ知らせるものだから、ことに秋風について。言Dうようになつてきた。言わば、ウェットの極致の心情が、「身にしむ」なのである。

(注4) 俳諧はいかいになると、それらが和歌に比べて、よほどドライな芸術だつたから、また感じが変わってくる。秋のあわれという感傷性よりも、秋の冷気を主調として、より対象的・即物的・感覚的に受け取られるようになってきた。E湿润じゆんな和歌的抒情じやうじやうの否定の上に、俳諧の客観的態度が確

立された結果、季語がそのニュアンスを変えてきた一例である。

身にしみて大根からし秋の風

松尾 芭蕉

などという句を見ても、深秋の冷気（れいき）の感覚をまず受け取るのである。そして、「野ざらし」の句のように、「冷まじ」という感じにも使っている。だが、秋という先入観念から、観念的に秋の初風の冷やかさを「身にしむ」と感じた句の例もないわけではない。結局、この季語は、秋のあわれを基にしたその感傷性を完全（くわんぜん）に脱することはできないのである。

（岩田九郎『芭蕉の俳句俳文』・山本健吉『ことばの歳時記』による）

（注1）貞享甲子＝貞享元年（一六八四年）。

（注2）江上の破屋＝江戸の隅田川のほとりのあばらや。芭蕉庵。

（注3）髑髏＝雨風にさらされて肉の落ちた頭骨。

（注4）俳諧＝室町時代末期に生まれた文芸、俳諧の連歌のこと。現代の俳句につながる。

問1 本文中の、風の声そぞろ寒けなりの意味として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 風の音もそれほど寒そうではない。

イ 風の音もぞつとするほど寒く感じることだ。

ウ 風の音もなんとなく寒そうである。

エ 風の音もことさらに寒さを強調しているようだ。

問2 芭蕉の句の中に、風のしむ身かなとあるが、この時、芭蕉はなぜそう感じたのか。その理由として最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 先ほど眺めた野ざらしのことは人には言つまいと心に秘めておくことが辛くなつたから。

イ 折からの秋風に、年来の病気がぶりかえすのではないかという不安にかられていたから。

ウ 風雨にさらされた髑髏を見て、吹きわたる秋風の寒さがしみじみと身にしみ渡つたから。

エ この旅では、自分が野ざらしになるようなこともあるかもしれないと覚悟していたから。

問3 本文中に、一概には言えないとあるが、何が「一概には言えない」というのか。最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 「身にしむ」という言葉は主として秋風について言われているということ。

イ 「身にしむ」という言葉は俊成の和歌を抜きにしては考えられないということ。

ウ 「身にしむ」という言葉は季節に関係なく和歌に使われるのが普通だということ。

エ 「身にしむ」という言葉は季節に関係なく和歌に使われるのが普通だということ。

エ 「身にしむ」という言葉は梅、鹿、恋といったものにも言われているということ。

問4 本文中の、それの指し示す内容として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 紳士の最高の教養

イ 「心ある」という状態

ウ 心ある人士の要件

エ 何にでもすぐほろりとなる涙もろさ

問5 本文中の、きらいがあるの意味として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 欠点がある

イ 事実がある

ウ 錯誤がある

エ 傾向がある

問6 本文中の――線を引いたアからエまでの語の中から、他の四つと語の構成が異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 関係

イ 芸術

ウ 最高

エ 湿润

オ 完全

問7 本文中の、*複雑なと同じ活用形のものどれか。本文中のAからEまでのの中から一つ選び、記号で答えよ。

A 思いがするという

B 考えられない

C 言えば

D 言うように

E できないのである。

国 55 国 高専 問 24

4 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(各段落の末尾の数字は、その段落の番号である。)

かつてブナの森は村の水源や燃料、建築材など多様な資源の供給源であった。というより森と村とは一体となった必須^{ひつす}の共生空間であり、その関係性が破綻^{はたん}すれば村の生活はたちゆかない。こうした生活と一体となった自然のあり方を、「生態資源」として見直すことが提唱されている。たとえば森を、食料や木材などのように単独で取り出せる資源の集合としてではなく、その場にあることで多面的な意味をなすものとしての森、つまりその生態系全体を密接な不可分の総合的な資源として考えるあり方である。ブナはもちろん家の建築材であり、炭の材料として切り出されはするが、森の形を崩すまでに切られることはない。それはブナの森が村の水源となり、同時に雪崩を防いでもいるからである。また、森の中は春は山菜、秋はキノコの生産の場となっている。森は森としてそこにあることでその全体がまさに「生態資源」なのである。材木の寄せ集

めではない生きた森だからこそ有効な人と自然との共生がここには見られるのである。

「一

こうしたあり方は、考えてみれば人が自然の中で暮らすときにはごくあたりまえのことである。人は、自分も含めた生態系の中でその（ a ）が絶えないように暮らさねばならないからであり、そのような目先の欲望を（ b ）する技術、文化を創りあげてきた人々のみが持続しえてきたというのが人類の歴史であつたはずである。しかし、人は次第に都市に住むようになり、必要なものを個々の資源として遠い自然から収奪してくるだけの生活様式、いわゆる都市文化を創りあげてきた。こうして、自然の中に一体的に暮らす「自然文化」と、自然を資源の供給源としてその外におくことで成立する「都市文化」という新たな対比が生まれた。それは当然人の生き方、考え方にも大きな（ c ）を生じさせてきただろう。

「一

かつて、村の周辺の自然は生活上の環境として日々認識され、そこからの糧を頼りに日々の生活が営まれてきた。しかし、森との共生を失った都市にとつてもはや森は遠い存在でしかなく、森を訪れることも少なくなつた。「エー」、森を木材やレクリエーション資源としてしかその意味を見出し得ないようになつてしまった。人から見えなくなつた森は木材資源の供給地として伐採され年々その面積を狭め、その豊かさと同様な機能とは急速に失われてきた。残り少なくなつた森は科学、主として生態学の対象として研究され、むしろ本やテレビをとおしての、その

成果が人々の森への間接的な認識となつた。かつては一体のものであつた人々の森に対する認識と利用形態とは、都市文化にあつては、森の科学的認識と資源利用とにみごとに分断されてしまった。

「一

近代科学が対象をより客観化するとすれば、科学はまさに都市の文化ともいえ、その一つの典型である。森が身近にあるうちはあえて切り刻み数字化するような科学的調査を行う必要はなかつたのではないだろうか。たとえば、ブナ林に台風の被害があつたとしても、それは森に入つて一回りすれば、その全体像が数字としてではなくともどれほどのものであつたかはかなり明確に意識され得たのではないかと思われる。それは被害にあつた身近な人々の悲しみや生活のあり様を必ずしも科学的に私たちが認識しないまでも、私たちはそれらを十分に理解し、共感しつつ共に暮らしているのにほぼ等しいものではないだろうか。

「一

それでも科学的な価値としてだけではない森の意味を考え、森に共感をよせるわずかな人々が自然保護にとりくみ始めている。だが、その自然保護の運動はなぜか評判が良くない。自然を壊す側のいわゆる開発派からではなく、むしろ環境保護派といわれる側からの非難の声が結構ある。いわく、「自然保護」などはおこがましい、人間は自然に守られて生きているのであつて、そうした保護という考え方が改めなければならぬ、というのである。しかし、それには疑問がある。一体、何のために自然保護がおこなわれるのだろうか。自然保護についての論説の多くは結果的に「人のため」に行きつく。たとえば、きれいな水や空気は豊

かで健全な自然があつてはじめて人に供給されるし、食料も産業の資源ももとはすべて自然からである。ガンやエイズの特効薬の発見にも熱帯のジャングルなどあらゆる生物の宝庫である自然地域が必要とされている。現在では、こうした自然を生物資源の観点からみることがその保護を考える上でも重要な根拠になっているのだが、それは、明らかに周囲の環境からすべての資源を調達しなければならない都市文化に特有の考え方である。

「森を自然科学として理解するあり方や資源として保護しようとするあり方が、実は両方とも都市文化そのものだということがわかる。現代が直面する環境問題が地球規模にまで急速に拡大した根本原因はまさにこの都市文化にあり、これは明らかに現在の自然から資源を奪い浪費するだけの都市のあり方が問題にされているのである。かいつてかつてのように狭い地域の自然と一体になった共生的空間に人が閉じこもるわけにはいかない。人々の意識と移動とはもはや地球規模にまで拡大し、宇宙にまでその足跡が及ぼつとしている。「宇宙船地球号」はもはや観念だけのものではなく、日々テレビで目にする地球の映像と相まって、まさにわれわれの世界像そのものである。地球はもはや、人の背後にあつて人を支えている森とその森に支えられて生活する人とを一体のものとしてのせている、宇宙を漂つただ一つの村にすぎない。都市文化を否定するのではなく、地球をトータルに□とする新しい自然像を人々に供給しうる科学こそが新しい文明への転換をなし得るもので

はないかと思う。

「わたなべりゅういち（渡辺隆一）「ブナの森で考えたこと」による」

問1 本文中の、（ a ）から（ c ）に入る語として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 抑制 イ 増幅 ウ 資源
エ 製造 オ 一致 カ 相違

問2 本文中の、「ニ」に入る語として最も適当なものを、次のアからエまでのの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア だが イ そして ウ 一方 エ なぜなら
ア このように イ そもそも
ウ むしろ エ しながら

問3 本文中で筆者は、近代科学が対象をより客観化するとすれば、科学はまさに都市の文化ともいえ、その一つの典型である。と主張しているが、なぜそういえるのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 都市文化こそ自然の豊かさや多様な機能とを保存してきたといえるから。

イ 都市文化は自然に支えられて生きている人々を常に保護し育成

してきたから。

ウ 都市文化は人々の欲望を満足させながら、常に新しい科学文化を創ってきたから。

エ 都市文化が自然を対象として分離することで、資源の供給源としてのみそれを活用してきたから。

問4 本文中の空欄□に入る語として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選び、記号で答えよ。

ア 「自然文化」 イ 「自然保護」

ウ 「生態資源」 エ 「都市文化」

問5 本文の論旨に従って、筆者の言う「自然文化」に属する事柄を、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 森を豊かな木材資源の供給地と考える。

イ 森を人と自然が共生する総合的な場と考える。

ウ 森は人の手を一切加えてはならないものと考ええる。

エ 森の実態を数値によって科学的にとらえようとする。

問6 本文の内容と矛盾しないものを、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自然を資源の供給源として考えるあり方は、自然保護の立場か

らは排除されるべきだと思われる。

イ 都市文化が進展するにつれて、人々は自然を客観的にデジタル化して把握することが可能となってきた。

ウ 地球規模に拡大した環境問題を解決するには、都市文化を否定し、かつての自然文化にもどるべきである。

エ 人間は自然に守られて生きているから、自然保護という考え方を改めよという批判が開発派から寄せられている。

問7 この文章を、次のように大きく四つの意味段落（起・承・転・結）に分けるとすると、形式段落 〃 はどのように分けたらよいか。

後のアからエまでの中から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

・ 起 自説の前提（かつての森と村との関係のように、生活と一体になった自然のあり方を生態資源として見直すべきだ。）

・ 承 問題の分析（生活様式が自然文化から都市文化に変化するにつれ、人々の意識も森を客観視するように変わった。）

・ 転 前提への反論の検討（自然保護については人中心の考えを改めるべきだと言ったが、結局は人のための保護なのだ。）

・ 結 自説の主張（昔のような自然文化に戻れない以上、地球を新しい総合的な共生空間として捉え直すしかない。）

ア 起 承 転 結

イ 起 承 転 結

ウ	起	承	転	結
エ	起	承	転	結

国 語 高 専 問 題

5 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

母の日記を二度目に読んだのは、中学三年生の夏だった。思いがけない再会になった。

「敬一、釣りに行かんか。」

父が急に誘ってきた。まだ陽の高い夕方だった。工場が盆休みに入った初日のことだ。

お盆の間は殺生ころせをするものではない、と父はいつも言っていた。そういうことには意外に古風なハルさんも、ふつつなら「そげなことしたらいけんが、あんた。」と父を咎とがめるはずだった。だが、健太をおぶって台所仕事をしていたハルさんは、釣り竿さおを持った父が「ほな、行ってくるわ。」と声をかけると、流し台に向かったまま「気をつけてなあ。」としか返さなかった。父も言い訳めいたことは口にせず、外に出で、車に乗り込んだ。なにかあるんだろうな、と少年にも察しはついた。まあ、べつにいいけど、と聞き直って助手席に座った。父の誘いを断らなかったのは、逆にこっちから挑発するつもりもあったのかもしれない、十五歳だった。家族を最も嫌っていた時期だった。ささいなことでハル

さんと言い争いをして、もつ何日も口をきいていなかった。

車は、ふるさとの街を東西に分けて流れる川へ向かった。父が得意なのは、浅瀬に毛針を放り込んで虫と間違えたハヤをひっかける、「かがしら」という釣りだ。夕陽のまぶしさに毛針の動きをうまく合わせれば、一時間で二十尾近く釣ることができる。だが、父は浅瀬の場所をほとんど吟味することなく、「このへんでええか。」と車を停めた。「かがしら」にはもつと陽が傾いてからのほうがいいのだが、かまわず河原へ下りていった。少年も黙って後につづく。車の中ではとりとめのない話しかしなかった。本題はいまからのだろう、と覚悟を決めた。

釣りを始めた。ゴムサンダルを履いて浅瀬に入り、手首をしゃくるようにして毛針で川面かわもを叩たたいては引き上げる。あんのじょう、当たりはびくりとも来ない。

「のう、敬一。」

父が言った。「この河原、覚えとるか。」と毛針を放り込み、「もう忘れたかのう。」と引き上げる。

「ここで……なにかあったの？」

昔は、もつと水も深かったんじゃ。お盆になると、灯笼流とうきゅうりゅうしの舟がぎょうさん流れての……死んだお母ちゃんの初盆のときも、ここから舟を流した。」言われて、ぼんやりと思いだした。

昔は、どこの家でも灯笼流しをした。送り火の晩に、舟にろうそくを立てて、お菓子やらなんやらも積んで……川がぼうつと明るくなるん

よ。きれいじゃったよ。他の舟は途中でひっかかって止まったりするんじゃないけど、お母ちゃんの舟は、川の真ん中を流れていって、最後に見えるようになるまで、まっすぐ流れていったんじゃない。」

川が汚れるから、と灯籠流しが禁止されたのは、その翌年のことだったという。

「もう忘れたか。」と父は苦笑して竿を立て、「まあ、それでええよ、昔のことなんじゃけえ。」と竿を寝かして、毛針をまた川に放り込む。少年も同じように竿を操りながら、川面を見つめる。夜の闇の中、川面にろうそくの明かりを映し込んで流れていく無数の小舟を思う。父と一緒にそれを目で追う幼い自分のことも、思う。

「お母ちゃん、口きいとらんのじゃて？」父は言った。この「お母ちゃん」は、ハルさんだった。

「まだいっぺんも『お母ちゃん』いって呼んでくれんのよ、いって……お母ちゃん、つらがとつたど。」

なにも応えずにいたら、父は顔のまわりを飛ぶヤブ蚊を手で追い払って、「『お母ちゃん』の気持ちもわかつちゃれや。」と言った。少年は黙ったままだった。父の話も途切れた。街のほうから、盆踊りの練習をする太鼓の音が小さく聞こえた。

「お、釣れた。」

父の竿の針先に、ハヤが掛かった。だが、父はハヤの口から針をはずすと、そのまま川に戻してやった。

「盆のうちは、やっぱり殺生しちゃあいけん。いまのも、どこぞのご先祖さんが帰ってきたんかもしれんけん。」

「……うん。」

「盆じゃのうても、殺生はいけん。やっぱり、生き死には、いけんよのう。」

父は川の流れて手を洗い、ついでに顔を洗いながら、つづけた。

「敬一、お母ちゃんの日記、読んでみるか。」

「え？」

「車の中に置いてあるけん、読みたいんじゃないたら、読めや。」

濡れた顔をランニングシャツの腹で拭いて、竿をかまえ直す。

「いまのお母ちゃんには内緒ど。黙って持ってきたけん。今夜一晩、読んでええ。明日の朝、車の中に戻しといてくれ。」

「……うん。」

「それで気がすんだら、お母ちゃんに、もうちいと優しくうしてやってくれや。アレも、ものの言い方にキツいところはあるけど、性根は優しくて、弱いんじゃないけえ。」

父はまたハヤを釣った。今度はヒレかどこかに針がひっかかっただけなのだらう、何度か竿を振るとあっさりとはずれ、ぼちゃん、と川に落ちた。

盆踊りの歌が聞こえる。スピーカーを通した、ひずんだ音だった。それがなにかの合図になったように、向こう岸の森で、蟬がいっせいに鳴

きだした。

「お母ちゃんの日記……ずっと持っとたら、いけん？」

少年が訊くと、父は少し間をおいて、「いけん。」と言った。

「なんで？」

「なんでも、じゃ。」

「……なんで、いけんの？」

「敬一のお母ちゃんは、いまのお母ちゃんだけじゃ。」

父はまた川の水で顔を洗った。 ばしやばしやと乱暴に、顔を何度もこすった。

その夜、少年は母が遺した言葉をすべてノートに書き写した。最初に読んだときには気づかなかったが、病気が進むにつれて母の字は細くなっていく。ノートの罫の中に字が収まらなくなってしまふ。最後の頃は、漢字をほとんど書けなくなっていた。「けいちゃん」とひらがなで書かれた文字をじつと見つめて、少年は歯を食いしばって泣いた。

約束どおり、日記は翌朝、父の車の物入れの中に返した。その次の日に物入れの蓋を開けてみると、中にはもうなにも入っていないかった。もう一つの約束は、守れなかった。少年はあいかわらずハルさんを「お母ちゃん」とは呼ばなかった。父にまた言いつけるのならそれでもいい、と思っていた。父が怒って、出ていけ、と言つのなら、出ていこう。

けいちゃん、お母さんは天国に行ってからでも、ずっとけいちゃんのお母

さんです。

ノートに書き写したこの言葉があれば、一人きりでも生きていける、と思った。

(重松 清『卒業』による)

問1 本文中の空欄□・□に入る語として最も適当なものを、

次のアからエまでのの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- | | |
|---------|----------|
| ア さつさと | イ ぐずぐずと |
| ウ のつそりと | エ こつそりと |
| ア ずばりと | イ ぎくりと |
| ウ ぼつりと | エ しょんぼりと |

問2 本文中に、「かがしら」にはもつと陽が傾いてからのほづがいの

のだが、かまわず河原へ下りていった。とあるが、それはなぜか。

その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

- ア 工場が盆休みになり、父は好きな釣りをしたくてしかたがないので、陽が傾くのが待ちきれなかったから。
- イ 「かがしら」という釣りの方法は父が得意とするもので、どのような時間帯でも釣り上げる自信があったから。

ウ 父は、お盆の間は殺生するものではない、と口ごもるから言っ

いる手前、誰かに見られると困ると思ったから。

工 息子と妻との関係を改善するために、釣りを口実に息子連れ出したが、父はどう話すかで頭がいっぱいだったから。

問3 本文中の、あんのじょうの意味として最も適当なものを、次の

アからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 予想に反し イ 思った通り

ウ 不安が的中し エ 不思議なことに

問4 本文中のaからdまでの、お母ちゃんを「敬一」の実母（死んだ母親）と継母（今の母親）とに分けた場合、最も適当な組み合わせを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 実母 a・d 継母 b・c

イ 実母 a 継母 b・c・d

ウ 実母 a・c 継母 b・d

エ 実母 a・b・c 継母 d

問5 本文中に、「もう忘れたか。」と父は苦笑して とあるが、「父」

が「苦笑し」たのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 死んだ母親のことを思い続けているにもかかわらず記憶があい

まいな息子に対し、小さい時だったから覚えていないのも無理はないと思っっているから。

イ 母親の初盆の翌年から灯籠流しが禁止され、この川に来ることもなくなつたから覚えていないのも無理はない、と月日の経過の早さに驚いているから。

ウ 敬一の実の母親が死んでから今日まで、その死を話題にするこ
とがなかったために記憶がない息子に対して、放っておいて申し
訳ない、と悔やんでいるから。

エ 母親の初盆のことも覚えていないのに、死んだ母親を口実に継
母と仲違いをしている息子を腹立たしく思う一方で、それを反抗
期にありがちな態度だ、と仕方なく思っているから。

問6 本文中に、ばしゃばしゃと乱暴に、顔を何度もこすった。とある

が、この時の「父」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選び、記号で答えよ。

ア 今の母親を一度も「お母ちゃん」と呼ばうとしないで、いつまでも死んだ母親の日記にこだわっている息子を腹立たしく思う気持ち。

イ 亡き母を思う息子のしつこさにほとほとあきれ果てるが、このような性格に育つたのは自分に原因があると思ひ至り、情けなく思う気持ち。

ウ 今の母親しか木当の母親はいないのだということを、息子が納得できるように説明ができない自分のふがいなさを打ち消そうとする気持ち。

エ 今の母親がかわいそうだという思いと、亡き母への思いを断ち切らせるのは忍びないという思いとが入り交じった心の迷いを悟られまいとする気持ち。

問7 本文中に、少年は歯を食いしばって泣いた。とあるが、なぜ「歯

を食いしばって泣いた」のか。その理由を説明したものとして不当なもの、次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 今の母親を「お母ちゃん」と呼んだら、若くして死んでしまった母がかわいそうだと思ったから。

イ 闘病の苦しさの中にありながら、母が誰よりも自分のことを大切に思っていたことを知ったから。

ウ ひらがなでしか自分の名前を書くことができなくなるまで母を衰弱させるような病気が憎かったから。

エ 自分が持つべきだと考える母の日記を取り上げられて、どうすることもできない自分が情けなかったから。

オ ここで声を出して泣いてしまったら、これまでの家族に対する意地が一気にくじけてしまいそうだったから。

H17 国立高専 国立 国語 解答用紙

問題番号		解 答	
50-KY-05 国-国語-専-05	5	問 1	
		問 2	
		問 3	
		問 4	
		問 5	
		問 6	
40-KY-04 国-国語-専-04	4	問 1	a
		問 2	
		問 3	
		問 4	
		問 5	
		問 6	
30-KY-03 国-国語-専-03	3	問 1	
		問 2	
		問 3	
		問 4	
		問 5	
		問 6	
20-KY-02 国-国語-専-02	2	問 1	
		問 2	
		問 3	
		問 4	
		問 5	
10-KY-01 国-国語-専-01	1	問 1	
		問 2	
		問 3	
		問 4	
		問 5	
		問 6	

H17 国立高専 国立 国語 解答

	問題番号		解	答		
50-K-専高-国 50-国	5	問 1	ア		ウ	
		問 2	エ			
		問 3	イ			
		問 4	ウ			
		問 5	ア			
		問 6	エ			
		問 7	エ			
40-K-専高-国 50-国	4	問 1	ア	ウ	ア	
		問 2	イ	カ	ア	
		問 3	エ			
		問 4	ウ			
		問 5	イ			
		問 6	イ			
		問 7	エ			
30-K-専高-国 50-国	3	問 1	ウ	D		
		問 2	エ			
		問 3	ア			
		問 4	イ			
		問 5	エ			
		問 6	ウ			
		問 7				
20-K-専高-国 50-国	2	問 1	こくじ			
		問 2	ゆちゃく			
		問 3	ほどこ	す		
		問 4	まかな	つ		
		問 5	にゅこわ			
10-K-専高-国 50-国	1	問 1	設	ける		
		問 2	奮	い起こす		
		問 3	故障			
		問 4	操縦			
		問 5	簡潔			
		問 6	効率			

H17 国立高専 国立 国語 解説

国 55 国 高専 め 10

1 問1 「設ける」は、前もって準備をする、建物などを設置するという意味。

国 55 国 高専 め 8

2 問1 「酷似」は、非常によく似ていること。

国 55 国 高専 め 8

3 問2 句の「野ざらしを心に」が理由である。あとの鑑賞文を参考に
する。

問3 「一概」はひとくちに、おしなべてという意味。「身にしむ」という言葉は主として「秋風について言うようになつ」たが、梅の香などほかの例もあるということ。

問4 前の段落で、「『心ある』という状態」について説明し、「こ」では、その内容の変化を述べている。

問6 ほかは意味が似ている漢字を重ねたもの。「最高」は「最も高い」と上の語が下の語を修飾している。

問7 「ニュアンス」という体言に続く連体形。

国 55 国 高専 め 8

4 問1 c 文化の「対比」が、生き方、考え方にちがいを生じさせた、
という文脈。

問2 森に対する態度を並べて、付け加えている。

段落から 段落の内容をまとめて、指し示している。

問3 「都市文化」は「自然を資源の供給源としてその外におくことで成立する」ものとする。科学を客観化するものとするなら、自然と一体ではない都市文化といえるのである。

問4 空欄の直前に「トータルに」とあるので、同じような意味を表す「一体」に着目する。「地球はもはや……森とその森に支えられて生活する人

とを一体のものとしてのせている、……一つの村」とあり、地球を都市と資源の供給源である自然に分断するのではなく一つの資源としてとらえようという文脈をつかむ。

問5 「自然文化」は「自然の中に一体的に暮らす」とある。ほかの選択肢は人が自然と距離をとっている例である。

問6 段落に「森が身近にあるうちはあえて切り刻みデジタルするような科学的調査を行う必要はなかった」とあり、デジタル化が可能なが読みとれる。

問7 段落で、「しかし、それには疑問がある。」と述べ、反論の検討をして、「転」になっていることをつかむ。

国 55 国 高専 め 8

5 問1 直前に「言い訳めいたことは口にせず」とあるので、すばやく行動していることがわかる。

言いたいことがあるのだが、なかなか切り出せずにいた父が、本題を話し始めた様子に合うものを選ぶ。

問2 「かがしら」に向かない時間でもかまわないのは、釣りが口実だからである。

問4 aは「死んだお母ちゃんの初盆のとき」の舟だから実母、b・dは父が気持ちをおわかってやつてほしいと考えている継母、cはあとに「日記」とあるので、日記を書いた実母。

問5 父は、死んだ母のことが忘れられない敬一に困っているのに、敬一が母の初盆のことは忘れてしまっているから、うまくいかないものだと思つて苦笑しているのである。

問6 敬一の死んだ母を慕う気持ちに心が動いて、涙ぐみそうになったのを、現在の生活をうまく過ごすためには打ち消さなければいけないと、乱暴に何度も顔をこすっている父の心情を読み取る。

問7 母の日記をずっと持っていたのにそれができない悔しさが心情の中心である。言葉は写せても母の筆跡は返さねばならないのである。